

第二十二回陸賞受賞作品自選三〇句

桃傷む

加藤 明虫

水中に葉が立ち淀むコロナの春  
低く打つ鋼鉄の杭春野道  
白塗りの石の橋映え朧月  
トンネル栽培低く堇の苗を圧す  
堀の外に大き鉢植おぼろ月  
ビル工事黒網垂らし花曇り

受賞の言葉

俳句に言葉が必要なのは当然だが、その前提に何か感じたり考えたりが必要だ。とはいえ私もその根本に無頓着になりがちで、そこをうまく収めた人の句を見ては「なかなかこうは言えない」などと嘆息するのが常だ。

ところで大先達の加藤楸邨が自句「おぼろ夜のかたまりとしてもの思ふ」を自解して「何かかたまりのやうなものが自分の中にあるのがつてゐて、なかなか句らしいものになつてくれないのである。しかし何も無いといふ

蜻蛉生れ足場の網に取り付きぬ  
シエルターの入口ひそと青嵐  
爆弾の性能憎む溽暑かな  
戦火消す神大夕立なし給へ  
黒い向日葵光少なに目に宿る  
石に鳩暑を訴ふる目は見せず  
保線区に簡潔な橋秋めけり  
石に藻の被さり乾く法師蟬  
見当の先まで深く桃傷む  
手鞆のやうな包のただちや豆  
嫁の妹弾丸で来る秋時雨  
秋の会食アクリル仕切りの隙に嫁

のではなく、たしかに  
自分を奥の方から動か  
してゐるものがあつて  
……（後略）（「加藤  
楸邨 自選三百句」春  
陽堂）と書いているが、  
ここに突破口を感じる。  
省みると今夏の「よ  
こはま句会」での中村  
先生後日選の総評に  
「今回はまことに低調、  
自信をもつて採れる句  
なし。きつと残暑のせ  
いでしょう。頭ででっ  
ちあげるのではなく、  
俳句は詩、情感、抒情  
あつてこそ」と書き添  
えがあつた。突破口は  
同じと感じた次第だ。  
末筆ですが皆様、  
「よこはま句会」へぜ  
ひ、いらしてください。

ぺらぺらの椅子を傍に菊花展  
暮れ残る葉の白光り冷えすすむ  
側溝に蓋一つ乗る枯野かな  
犬連れの一団集ふ寒き丘  
ごはごはと舗道の荒ぶ冬の月  
夕凍みの八幡に舞ふ太極拳  
旗の端のあらあら解け冬三日月  
眼前の鉄塔強し寒空に  
極月の竹林肉の臭ひせり  
数へ日の梔子の実の色が乗る  
狼像の片辺に石路の花呆け  
婚の日は雨水や天は持ち堪へ